雑学書庫 知識の記録

「ニーズ」の四つの顔：ブラッドショーの社会的ニード分類

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/13745/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

地域の住民センターで、高齢者向けの見守りサービスを新しく始めることになったとします。担当者が最初にぶつかる問いは、意外と単純です。このサービスを本当に必要としている人は誰で、何人いるのかということです。専門家から見て危うそうな人、本人が大変だと話す人、実際に申請窓口を訪れた人は同じ人ではないため、答えはすぐには出ません。 この混乱を整理してくれた枠組みが、イギリスの社会政策学者ジョナサン・ブラッドショー（Jonathan Bradshaw）が1972年に示した社会的ニード分類（Taxonomy of Social Need）です。かみ砕いて言えば、「ニードがある」という言葉が実際には四つの異なる使われ方をしていると指摘したもので、規範的ニード、感得ニード、表明ニード、比較ニードがその四つです。医療サービスに関する論文集に載った短い文章でしたが、今も社会福祉や保健分野のニード調査で真っ先に挙がる古典です。 本稿では、ニードを一つの方法で測るとなぜずれるのかから始めて、四つのニードの意味と例、さらに四つを重ねて読む方法と限界まで順に整理します。 ニードを四つの目で見る 「ニード」という言葉が一つの意味では足りない理由 福祉サービスでは、たいていお金を払う人とサービスを使う人が同じではありません。市場では喜んでお金を払うときに需要が生まれますが、福祉では支払い能力に関係なく必要を見なけれ